

特許調査をインターネットで行う危険性

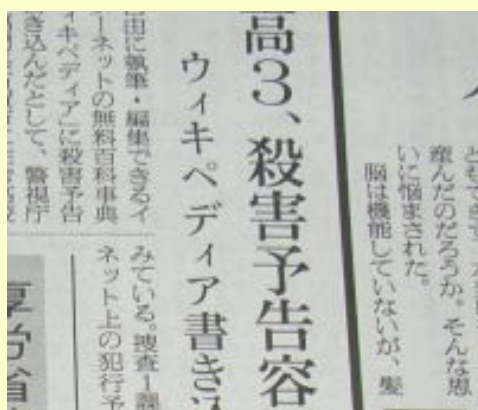
特許調査は、[簡単にできる](#)と説明しているので、危険性についても触れておきたい。

昨今はネット上の掲示板に、脅迫など不法な書き込みをすると、被害届けを受けた警察によって、すぐに犯人がつかまる。

なぜなら書込をしたパソコンが特定されるからだ。

▶ Information

(Yahoo知恵袋「[インターネットの書き込み犯罪について...](#)」)



2009.06.19朝日新聞
殺害予告をネットに書き込んだ高校生逮捕

書き込んだ単語から、パソコンまで特定されてしまうということは、ネットを使用した調査のために使った単語は、やすやすと漏れて利用される可能性もまた高い。

実際、本ホームページへ、どのような検索語を伝えて訪れたかを、サーバーの解析メニューから知ることができる。

かつてネットの黎明期(れいめいき)に、IBM社のサイトで特許調査が出来ると話題になったことがある。

その後、このサイトで調査を行うと、IBM社へ新規技術のヒントを垂れ流すものであるという認識が生じ、多くの企業では、そのサイトの使用を禁止したという。

だから、単語だけで技術が特定されてしまうような検索式を使用して、直接IPDLなどで検索することは、危険だ。

たとえば、最近テレビで宣伝(CM)されているエアコン製品は、人が居ないときや、寝ているときに消す(弱める)機能を売り物にしている。

これなど、聞いてしまえばだれでも着想したような技術だ。

つまり、エアコンに付ける付加価値技術のヒントを探している人が、「 人、動かない、消える」などという検索語に触れば、フラッシュの光のように、あっというまに脳裏に具体的なアイデアが浮かぶだろう。

検索している者は、結果の分析に夢中になると、自分の頭にあるアイデアをなんとかして言葉にして、タイプしようとするあまり、それが他人に見られるなどとは思わないものだ。

しかし、検索後は貴重な情報だ。

もし、IPDLで、各技術分野において、「検索語順位」なるものを公開したら、おそるべき新技術の金脈、宝庫となるだろう。

そこにはシーズ（種）、ニーズ（要求）、ソリューション（解法）が、まるで商店街の福引き特賞一万円札つかみ取り状態（比喻）で山積みされていることだろう。

IPDLから直接漏れる危険性はないとしても、暗号化（SSL等、ブラウザの右下に現れる鍵のアイコン）されていないため、途中経路で漏れるおそれがある。

ではどうすべきか。

（ 1 ）検索に言葉を使わない。 IPC（特許分類）を特定して、分類だけで調べる。

（ 2 ）単語（言葉）を使った検索では、IPDLで外郭を十分に調べ、単語数後に絞り込んだ上で、[パトリス](#)などの商業データベースを使えば良い。

これらは長い歴史を持ち漏洩問題に対し対策を採っているからだ。

（ 3 ）それでもネットにつながっている限り怖いというのであれば、スタンドアロン型（閉鎖型でネットに接続しない）のデータベースを使うことになるだろう。

つまり、IPDLに相当する情報を個別のパソコンに入れてしまえば良い。

（要するにネットに一切接続しないデータベースで検索するということだ。 大企業はそうしている。）

それは難しい（お金がかかる。）ことだが、本事務所においても平成5年からの索引情報（出願人、IPCなどの分類、請求項、要約の文字など）で15年にわたる特許情報を、単独のパソコンのみにより調査できる。

これで見つけた公報だけを、ネットで参照すれば、漏洩などの問題は無いと言えよう。

また、特許庁のイントラネットによる端末（[公報閲覧室](#)）を使うこともできる。



結論：我々は、安易に特許を調査検索できるシステムを使うことができるが、漏洩する恐れがあることを認識し、後ろで他人が見ていると思って検索すべき。

重要な単語に絞れたら、守秘義務を持つ（秘密を守る）信頼ができる調査の専門家に委ねるべき。

2009.06.24

[メール](#)

All Rights Reserved, Copyright © Yazawa Kiyoshi 2009

[閉じる](#)